

本日の讃美歌について

本日賛美する1954年版のI-284, I-288は、100年前の1925年1月12日10時から富士見町教会堂にて行われた植村正久牧師の教会葬において賛美された讃美歌です。そのことは「牧師植村正久教会葬執行順序」という文書に残されています。教会葬は、会堂内の椅子を撤去して立ち席としても入りきれず、場外も含め1,500人以上が集まったといえます（佐波亘編『植村正久とその時代』第5巻、1045ページ）。もちろん賛美されたのは、今の讃美歌ではなく、1903年版の225番、221番ですが、歌詞は異なるものの共通性の高い歌詞です。

とくにI-288「たえなるみちしるべの」は、1888年の植村正久・奥野正嗣・松山高吉『新撰讃美歌』に163番「みめぐみあるひかりよ」として収録されております。讃美歌は、1888年の『新撰讃美歌』、1903年、1931年の改訂を経て、1954年版、1997年の讃美歌21と続きます。163番も、1954年版へと引き継がれ、1997年の讃美歌21においても460番として収録されております。

『新撰讃美歌』に163番として収録された「みめぐみあるひかりよ」の歌い出しで始まる歌詞は、植村正久・季野夫妻により翻訳されたとされております（岩波文庫版『新撰讃美歌』下山嬢子注、243ページ）。

明治に翻訳された讃美歌が、今日私たちが使っている讃美歌に歌い継がれていることを味わいつつ賛美したいと思います。

参考までに、I-288 「たえなるみちしるべの」に相当する新撰讃美歌と1903年版讃美歌の1節・2節の歌詞を以下に掲載します。

1888年 新撰讃美歌 163番

～ みめぐみあるひかりよ かこめる くらきなかにもわれを みちびけ
夜（よ）はくらく家（いへ）はとほし 我（われ）をみちびたまへ

二 わがあしをまもりてよ いかにぞ 遠方（とほき）をまでみんことをのぞまんや
わが身のためにはたゞ ひとあゆみにてたれり

1903年版 讃美歌 221番

～ みめぐみあるひかりよ 日はくれ わがいへはいととほし さびしき
やみのなかにまよへる われをみちびたまへ

二 とほ(オ)くまで見ることを のぞまじ 主よわがよわきあしを まもりて
ゆくてのひとあゆみを しめしたまはばたりなん